



発行所 社会 宗像 大像  
〒811-3505 福岡県宗像郡玄海町  
電話 0940-62-1311(代)  
定価 一年送料共 1000円

初夏の陽光浴びて

# 五月・浜宮祭齋行



この赤飯で古来より遠い先祖を祝う祭日などに靈前に供える習わしがあった。これがいつの頃からか祝事に供えられる風習となり、現在に至っている。

午前十一時には、神職、参列者直ちに移動し、江口の釣川河口に鎮座する五月宮に於いて五月祭が執り行われた。

この五月・浜宮祭は古くは「五月会」と呼ばれ、秋籬が祀られており、爽やかな潮風が吹き渡る中、江口

の「放生生」と共に当大社の一大神事であった。往時は第一宮(辺津宮)第二宮(中津宮)第三宮(沖津宮)と組織し、許斐川の五社の神輿が神幸を行ったと記録にある。

恩により、見事なまでの戦争終結がなされ、また戦後の復興もなされた。崩御の後「みどりの日」という祝日に変わり、「自然に親しむ」ともにその恩恵に感謝し、豊かな心を「はぐくむ」と法律にその意義は述べられていた。

四月十九日の新聞を見て、大きな驚きと、力強い感激を持った人は多いであろう。それは「出雲大社の巨大神楽」の遺構発見のニュースである。平安時代の書かれた「口遊」という書に当時の建築物を暗記しやすく、大きい順に「雲太(出雲大社)・和二(東大寺大仏殿)・京三(平安京大極殿)」とある。太二、三が順位を表すと云う。大仏殿の十五丈(約四十五メートル)より少し高いとされた出雲大社の神楽は誇大伝承であり、建築技術上無理との見方が一般的であった。文明の黎明期に巨大な建築物が出現することはしばしばある。「ピラミッド」がそうであり、そして世界一の幻の建造物であった。この「幻の巨大建築」に挑戦した建築専門家の人々が居た。「六林組」のプロジェクトチームである。

今を去る十一年前「古代出雲大社の復元」し失われたかたちを求めて」と題した出版書がある、それは古事記、日本書紀に記されている雄大な社は、きつと存在したと信じ「大先達への敬意をこたへたにしかた」であった、と云う。さらに復元図まで作成されている。今度発見された巨大な柱溝はこの復元図の通りで、現在の出雲大社本殿の礎石十四階建ビルに相当すると云う。

さらに同チームの報告書には、工期六年、延べ十二万人を要する大事業とある。古代人の力と知恵、さらに信仰の力におどろく。

五月晴れの空に悠々と鯉のぼりが泳ぐ中、五月五日(端午の節句)に当大社恒例の五月祭並びに浜宮祭が齋行された。

午前十時三十分神湊の「浜宮」に於いて、太田宮司以下神職四名奉仕のもと、神湊区長榎木幸次を始め、責任役員、倉本清隆氏子会々長、地元元総代、玄海少年自然の家園武康友所長、神湊区民ら多数参列のもと執り行われた。

この赤飯は、米・酒・鯛・アが原産と東南アジアの米で云われていて、現在でも、琉球列島や九州・四国南部地方では少しではあるが現在でも作られている。

この赤飯は、文字通り赤い色をした(飯のごとで「セキハン」とか「アカマンマ」がなまって「オコマンマ」さらに「オコハ」と呼ばれる様になったと云う。その昔は「赤米」と呼ばれる米を使って作った飯なので、色が赤かったところから赤飯と呼ばれていた。

感動と試練の昭和を、国民と共に歩まれ、苦楽を共にされた昭和天皇の仁慈溢れる御聖徳を偲び、偉大な御聖業を讃える昭和祭、(緑の日)の四月十九日、厳粛に執り行われた。

午前十一時太田宮司以外神職参進、破舎にて修祓の後、拝殿所定の座に着座、齋宮が齋行された。

この神楽歌から「万代に世界の平和の基を築かむ」と祈念された昭和天皇の大

御心が拝されるが、このように昭和天皇は常に国民の上に思いを馳せられ、国民の幸福と繁栄を希求遊ばされた。

大東亜戦争では、我に利あらず、ために祖国は危急存亡の淵に立ち、ときに昭和天皇は、「身はいかにならぬともいふことめけりた

だふれゆく民をおもひて「国がすたれたら守らぬといばら道すすみゆくとよくさためけり」の御製に拝されるように、ただ国民を救おう、国体を守ろうと、なされ、そして終戦の御

には、「ハ滋二國ヲ護持シ得テ」との確固たる御信念を吐露され、「堪へ難キヲ堪へ忍び難キヲ忍び以テ萬世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス」と国民に進路を明示されました。



新緑の色彩やかな四月二十九日、昭和祭で賑う本殿

昭和十二年度、宗像大社奨学金新受給生の奉告祭が齋行された。

今上陛下のご成婚を記念し、「郷土を愛し、将来の日本を背負う有為な人材の育成」を主旨に、昭和三十四年十一月十一日に制定された当大社の奨学金制度は、宗像地区の各中学校を卒業

し、高等学校・専門学校に進学した第一期生六名(当時各校一名)に奨学金を支給して以来、今年度四十一期生迄の奨学生は、総勢六二四名を数えることとなった。

奨学生の選定については、宗像市・郡内中学校十校の校長の推薦とされており、基本的に各校二名ずつ計二十名となっているが、今年度は都合により十九名の奨学生が新たに推薦された。尚、今年度より五年間、

## 昭和天皇御聖徳を偲び 昭和祭齋行

このように昭和天皇の宏

大なる御仁滋と、深き御聖

古代から日

本人の心に

新授学生は左記の通り

第四十一期奨学生

渡邊 賢太(中央中 卒)  
矢野 賢太(大高中 卒)  
船越 重盛(大高中 卒)  
志志美英子(〃)  
熊谷慎太郎(福岡東中 卒)  
宮崎かな子(〃)  
岩永正仁(自由ヶ丘中 卒)  
山下 賢人(日の里中 卒)  
平岡多惠美(〃)  
川島 仁(玄海中 卒)  
吉田 誠史(〃)  
林 淳嘉(城山中 卒)  
江口 徹(〃)  
今橋 那子(福岡中 卒)  
山口佐知子(〃)  
佐々木綾子(河東中 卒)  
梅崎 聖生(津屋崎中 卒)  
綾香 清子(〃)

に、平成十二年度、宗像大社奨学金新受給生の奉告祭が齋行された。

今上陛下のご成婚を記念し、「郷土を愛し、将来の日本を背負う有為な人材の育成」を主旨に、昭和三十四年十一月十一日に制定された当大社の奨学金制度は、宗像地区の各中学校を卒業

し、高等学校・専門学校に進学した第一期生六名(当時各校一名)に奨学金を支給して以来、今年度四十一期生迄の奨学生は、総勢六二四名を数えることとなった。

奨学生の選定については、宗像市・郡内中学校十校の校長の推薦とされており、基本的に各校二名ずつ計二十名となっているが、今年度は都合により十九名の奨学生が新たに推薦された。尚、今年度より五年間、

形成され、培われてきた伝統に思いをはせる日が本来の意義である。初夏を思わせる程の強い日差しの中で、宮司を始め、氏子崇敬者等一同、この偉大な昭和天皇の御聖徳を偲び、さらに今上陛下の御聖寿の万歳を心から祈念し、玉串を奉り、祭典は滞り無く終了した。

木組の家  
総合建設業 株式会社 弘江組  
事務所 81106 福岡県宗像市大字元元一〇二五  
電話 (0940) 321-5567

北九州市小倉北区の医療機器メーカーの前会長・荒井範雄氏からの篤志により、「宗像大社・荒井奨学金」の設立が決定し、その第一回目の奉告も併せて、全奨学生並父兄が本殿に参集、先ず昭和祭に参列し、引き続き奉告祭を拝殿にて齋行した。

正后より清明殿に於て「奨学金受給説明会」を開催し、当大社太田宮司、荒井範雄氏の挨拶の後、担当者との説明を受け、立派な社会人となるよう勉学に勤むことを新たに誓った。

四月十九日の新聞を見て、大きな驚きと、力強い感激を持った人は多いであろう。それは「出雲大社の巨大神楽」の遺構発見のニュースである。平安時代の書に当時の建築物を暗記しやすく、大きい順に「雲太(出雲大社)・和二(東大寺大仏殿)・京三(平安京大極殿)」とある。太二、三が順位を表すと云う。大

余滴

沖・中両宮春季大祭齋行



更に、九時三十分、御嶽山々頂に鎮座する御嶽神社に於て、山田彦彦以下神職二名の奉仕の下、宗像大社責任役員河野英氏、JA宗像大島支店長、農業従事者氏等多数参列し、春祭齋行、本年の豊作が祈念された。

大島の山が緑を増し、山桜が鮮やかな四月十八十九日の両日、宗像大社沖津宮・中津宮両宮春季大祭が厳粛に斎行された。

大祭前日、早朝より奉賛会、婦人部が総出で連繩の張り替え、紫雲張り、幟を立て、直衣準備等の大祭準備が行われ、昼過ぎには準備万端整った。

出光大分地熱(株)安全祈願祭



去る四月二十五日午前十一時より出光大分地熱(株)の上事業所にて安全祈願祭が斎行された。

出光美術館(門司)オープン

「美術館は人の芸術作品であり、そこには日本人としての独創と美がなくてはならない。そして、優れた美術品の募集を常に心掛け、これを世界に人の心で教へ、これを必要とする人のために手厚く保存し、これを伝えることは、美術館の最も重要な使命である。」との出光興産株式会社創業者、出光三節翁の信を以て、出光美術館(門司)がオープンした。



去る四月十六日、延喜式内社の古社であり、又沈鐘伝説でも有名な鐘巻に鎮座する宗像大社旧境外掛社、織幡神社の春季大祭が盛大に斎行された。

織幡神社春季大祭

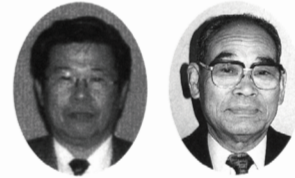
前日に時折雨が降るなどして翌日の祭典が案じられ、当日は冷たい風が吹き少し肌寒くはあったが晴天となり参道には職や漁師町の大小旗が裝飾され勢いよくはた

宗像大社歌会詠草

- 第四六七回 宗像大社歌会詠草
朝野 藤井 浩子
九号のワンピースを着て爽爽と歩きたみたいがもう間に合はぬ
(評) 健康のためにも誰もが今より瘦せたいと香子が仲々むつかしい。努力しなごころを、文語と口語の混合文体で詠って一種のペーソスを感じさせる。

# 宗像大社菊花会役員改選

## 高田太助会長の後任会長に 高島雪茂氏就任



去る四月十六日の宗像大社菊花会理事会上に役員改選が行われ、高田太助会長の後任として現副会長の高島雪茂氏が推挙された。高田太助会長は昭和四十六年宗像大社昭和大会が完成し、遷座祭の神賑行事として企画された。西日本最大の菊花展開催の主催団体、宗像大社菊花会の創立に尽力され、平成元年に会長に就任後、平成年に機に勇退したいとの申出により、役員からは被推挙を願う意見が殆どであったが、本人の退任の決意が同理事会上にて了承されることになった。

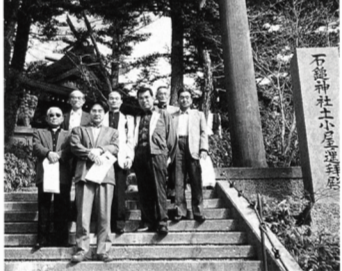
新会長に就任した高島雪茂氏は大正十五年生まれで現在七十三歳で高田前会長同様、宗像大社菊花会創建当初より尽力される。一方、小菊会役員会の会長として又、菊の全国組織である全日本菊花連盟宗像大社支部部長として、この菊花会とのパイプ役として幅広く活躍され、二十歳より菊作りに専念、数々の大臣賞を受賞されている。

引き続き新理事長には原田雪藏氏が選任された。原田氏は昭和六生生まれの六十八歳で昭和四十五より菊作りに始められ数々の要職を歴任され現在、自然流園芸会長として北九州地区の重鎮として活動されている。

名譽会長 太田可愛  
顧問 高田太助  
高島雪茂  
副会長 古波蔵正忠、池上福元、安永儀一郎、櫻木為生、千々和貞信、永島文男、楠理、井口正夫、石橋善治、高田太助、時田義光、宮島隆治、中祐成、今里一郎、下田

四月、十三日より一泊三日にて主基地方風俗保存会の研修旅行を行い、岩佐昭正顧問、田保会長以下八名で四国石鐘山系を中心に瀬戸内方面を訪れた。四国は、弘法大師の開かれた八十八ヶ所の霊巡礼の地として信仰の厚い土地

# 主基地方風俗保存会 役員研修旅行



柄で知れるが、神道に於いても各地に神社が多く、中でも石鐘神社は役員者が聞きなれた石鐘山の山岳信仰で有名である。一、二三日、小倉港よりフェリーで四国に渡り翌十四日に松山港より上陸、面河津を巡り石鐘神社の遺拝所に参拝、峻険なる山容を遠望してその靈氣に心打たれた観があった。その後、松山市に戻り、聖武天皇の勅命により行基が開山した名刹の石手寺(五十一番札所)にお参りして重要文化財の本堂、三

# 春季奉納盆裁展



境内の樹木が新緑に包まれる五月一日より五日迄宗像大社春季奉納盆裁展が本殿横の境内に於いて開催された。

重塔等を拝観、伊予松平十五万石の歴城、松山城を巡った。その日は道後温泉に宿をとる。道後温泉の発祥は遠く神代の昔、大國主神と少彦名神が出現し、訪れ体を癒された事より始まり、今でも道後温泉の丘上には両神を祀る湯神社(延喜式内社)が鎮座し四国随一の名湯を守護している。その出湯に一回旅の疲れを落とし和やかな一時を過ごした。翌日の二十五日、本州四国を連絡橋で繋ぐしまみ海道を通り帰路につく。途中、海神・武神として名高い大山祇神社に参拝、同社宝物で全国随一の収蔵を誇る武具・甲冑を拝観した。本州に夕刻、山陽自動車道に乗り入れ、宗像の地に着くと旅の慰勞会を開催して皆今回の旅で研修の実を得た事を喜び、共に次回への参加を誓った。

# 第二十四回 奉納吟詠大会

春の好天に恵まれた去る四月十六日恒例の神賑行事春季奉納吟詠大会が鶴洲吟詠会主催で開催された。日頃の精進の成果を宗像大神の神前に披露せんと、また師匠の先生方の情感溢れる詩吟を力強く詠じられ、会員達も真剣な表情で拝聴し、深い感銘を受けた。春のうららかな日和の中、今

の手により出展展示される神賑行事で春と秋の年二回開催されている。先ず開催前日の四月三十日の午後より当大社職員、盆裁会々員の手により会場設置作業が行われた。当日の午後より当大社職員、盆裁会々員の手により会場設置作業が行われた。当日の午後より当大社職員、盆裁会々員の手により会場設置作業が行われた。当日の午後より当大社職員、盆裁会々員の手により会場設置作業が行われた。

# 神郡宗像地方略誌(二)

宗像の古代を知る上に大変参考になる論文がある。昭和十四年に刊行された「西形」に田中幸夫氏が書かれた「考古学上より見たる古代宗像の文化」と云う一文である。

去る五月三日、四日に玄海中学校グラウンド・玄海町営グラウンドに於いて第十二回福岡県中学校選抜野球大会が優勝し、筑豊の大会で優勝している田主丸中が挙げられていた。試合を観戦すると、どの試合も接戦で、二歩も譲らないシーソーゲームが多く、中学生の試合とは思えないほどレベルの高いものであった。また感心したのは選手達の礼儀止しである。連日

# 第十二回 福岡県中学校選抜野球大会 "玄海マリンカップ" 開催



和となり、福岡県内各地より選ばれた十六チームが参加した。優勝候補としては秋の新人戦・古賀市長杯で優勝している香椎一中、筑豊の大会で優勝している田主丸中が挙げられていた。試合を観戦すると、どの試合も接戦で、二歩も譲らないシーソーゲームが多く、中学生の試合とは思えないほどレベルの高いものであった。また感心したのは選手達の礼儀止しである。連日

少年犯罪がテレビを賑わす時代の中で、爽やかに挨拶をする野球少年を見ると、殆ど犯罪を起さず少年達が少数の一部であって、殆どがその少年達のように素直なよい子達なのであると感じ、各級の監督さんの「野球を教育の一貫」として、世界を教育が見受けられる。結果は、筑後の田主丸中が優勝、福岡の城香中が準優勝、三位は筑前の宮田光陵中であった。

宗像の古代を知る上に大変参考になる論文がある。昭和十四年に刊行された「西形」に田中幸夫氏が書かれた「考古学上より見たる古代宗像の文化」と云う一文である。田中氏は、久留米出身の宗中(現宗意)時代の教師で、当時「宗像の古代文化研究者」の第一人者として世に知られた人で、「宗像郷土館」建設の中心者でもあった。氏の論文より抜粋しながら「神郡宗像」の風土、風俗を想像して見よう。「神郡宗像」の文字が初めて見られるのは、日本最古の文献である古事記、日本書紀であるが、それ以前の文字無き時代の古代の宗像には、いかなる民族によって造られたのか、如何なる文化が形造られていたのかわからない。『紀に記されている宗像君なる地方的首長の権威は、背景に大和朝廷の対大陸政策に欣然として起つ国防策一線の堅壁を譲りつつ、主都「奈良の都」の重圧を内外に知らしめる事を含んでいた、と想像される。しかし、此の想像は、宗像民族としての在来を具体的に立証すべきものでは無く、これには、学問的背景を持つ証明が必要である」と田中氏の「考古学的踏査」が始まった。当時の調査を、西郷輝久新聞等に執筆された氏の一文を引用して、宗像の歴史を振り返る。宗像の歴史を振り返る。宗像の歴史を振り返る。宗像の歴史を振り返る。



### 宗像大社歌会 俳句作品集(四四二)

自由ヶ丘 細川 禎子  
吹く風に庭一面に桃の花

福岡 森 清  
鳩群れて翔ては五月の野と  
なれり

小笹 山下つづえ  
春風がそよとふけば花吹雪

東郷 吉武 湧泉  
雨しと花片張りつく石地蔵

東郷 中野 きみ  
百年の古木に香れ梅の花

東郷 吉田 杵子  
観音のまなざし曇る花の冷へ

東郷 吉田 杵子  
留守電に残る声聞く雪の宵

東郷 三浦美千代  
春の陽に噴煙高し有珠の山

東郷 田中 雨葉  
産土神の芽ぶき一挙や月淡し

東郷 木原 房子  
梅薫る庭下塚も筆塚も

東郷 田中 靈象  
大阿蘇や一樹に万座花の傘



(続)

## 浜の寄物

146

いしいただし

宗像市の宗像の歴史を学ぶ  
ほう会 平松秋子会長で  
糸島郡志摩町姫島へ行った。  
当日の天気予報は雨、そ  
れも午後からは風と雷とい  
う予報だった。しかし家を  
出た時には陽も出ていたの  
で中止の連絡は入らなかつ  
た。博多駅の地下鉄に集員  
十数人の山の会の人達が、  
この雨でも姫島に  
渡るという。歴は  
うの半分ほどでも行  
くという。それで  
姫島「ロー」とな  
る。



西側  
前原駅から舟屋  
行きにのり(二〇分  
ほどで政志に着。  
雨足は一段と強く  
なるばかりでやむ  
気配はない。パス  
を降りて二・三分  
のところに姫島行  
くという。歴は  
うの半分ほどでも行  
くという。それで  
姫島「ロー」とな  
る。

船着き場から港に面して、  
漁師作業場があり、漁具類  
の修理や網が干されていた。  
休憩所で昼食をとり、そ  
こが一時に閉店すると言  
うことであつたので早目に食  
事を終えた。幸い雨も小降  
りとなり、島内巡りをする  
ことにした。  
休憩所の前が姫島神社の  
鳥居があり、小高いところ  
に神社が見えた。鳥居の左  
手下にえびす様があり、豊  
漁祈願の赤いサンゴが供え  
られていた。色を塗ったよ  
うな朱色だった。島特有の  
人家のせまうた狭い道を通  
っていたら、野村望東尼の案  
内板があり、すぐに望東尼  
碑のあるところになりつ  
いた。  
野村望東尼(のむらぼう  
とうに、一八〇六年一八  
六七年)、歌人、勤皇家、福  
岡藩士、野野村の三女と  
て生まれる。幼名もど。一  
七歳で同藩士郡利貴に嫁ぐ  
が半年余りで離婚、二四歳  
で同藩士野村貞貴の後妻と  
なる。二七歳のころか夫  
と共に歌人大隈道正に離事

### 話題の車紹介

#### 三菱「デイトン」

今回ご紹介する車は三菱  
デイトンです。この車は最  
近人気の三列シートの人  
乗りで、このタイプには珍  
しく五ナンバーサイズに納  
められている。後部座席に  
乗車する際、このタイプの  
車はセカンドシート乗降口  
側の三分の一がスライドし、  
乗車するのが一般的だが、  
この車は左右が中央から分  
割式になっており、どちら  
のドアからも乗り降りしや  
すくしてある。そのため乗  
車した人が、となりの人に  
気兼ねすることなくシート  
位置を変更出来るのが嬉し  
い。また、最小回転半径は  
クラス最小の五・一を實現  
つまりUターンしやすくとす  
る道幅が五・二あれば回転  
できるのである。もちろん  
最近の常識のものである衝  
撃安全強化ボディ、運転席  
助手席エアバック、急ブレー  
キのタイヤロックを抑える  
ABSも標準装備されている。  
エンジンには三菱自慢の  
GDIエンジンを搭載。G  
DIは走行状況に応じて低  
燃費と高出力、二つの燃焼  
モードを切り替え、燃費消  
費を極力抑える。発進や加  
速、上り坂などの高出力モ  
ードでは、直接噴射燃料の気  
化熱を利用して吸入空気の  
温度を低下させ、混合気の  
充填効率を向上。従来エン  
ジン並みの燃料消費で、き  
わめて強力な燃焼を實現す  
る。こうした切り替えによ  
り、トルク・出力の向上と  
燃料消費の低減を高次元で  
實現し、必要ときに必要  
な性能をムダ無く發揮する  
理想的な高効率エンジンに  
仕上げていた。その為二〇  
〇〇CCエンジンで十一  
五モード燃料消費率は十三  
と三列シート車トップの低  
燃費をもっている。乗車し



てみても感想は、このタイ  
プのほとんどの車はボンネッ  
トが見えず、前方の感覚が  
つかみずらいのが多いがこ  
の車は運転席からボンネッ  
トを視野に入れることが出  
来、車  
幅・車  
長の感  
覚をつ  
かみ安  
い。ま  
た最小  
回転半  
径五・一  
が示  
している  
通り、  
見たり実  
際には取  
り廻し  
がしや  
すくホ  
イパー

このからだ、糸島の山々  
や唐津が見えるはずだが、  
現福岡市中央区平尾の向  
向の山荘(平尾山荘)に隠  
一八五九年(安政六年) 夫  
と死別後、得度剃髪し招月  
望東尼と称した。一八六  
一年末より半年余り京坂に  
滞在したが、そのことが晩  
年の勲皇活動の大きな契機  
となる。福福後平野野臣  
高杉晋作等諸國の勤皇志  
士の擁護に、平尾の  
山荘は志士間の情報交換の  
場となった。一八六五年、  
福岡藩の弾圧によって姫島  
に流されるが、翌年九月高  
杉晋作の手配で救出され、  
山口・三田尻に移り六二歳  
で病没(福岡県史料館)。  
まだ歩ける人は西の方まで  
歩く。舗装道路が切れて、  
自然の海岸が見えた。鳥を  
巡るような道路は必要ない  
のではないかとそんな事を  
思いながら船着場に戻った。  
三時出発の船が待っていた。  
小さく降り雨はやんでい  
た。小さく降り雨はやんでい  
た。満足だった。

### 神郡宗像

宗像郡玄海町大字神湊字  
灘に鎮座する「木皮社」  
(宗像)を参拝した。この  
境内地は、小高き丘にあっ  
て、目前の神湊海岸防風林  
の松枝越しに玄界灘と鐘崎  
小形山、地ノ島が望まれ、  
西には大島の一部を見る事  
が出来た。往古よりの砂丘  
積りて出来た丘であらう、  
周辺は松と雑木が茂る森で  
あつたが、近年には住宅地  
と化しつつある。  
当社手下に広がる  
釣川河口も百数十  
年前までは対岸江口  
浜の約一キロ先にあっ  
て、当時は「米出」  
と呼ばれていた、こ  
の地名は今もこのこ  
ところ、垂見峠から  
流れる枝流の小川が  
海に入っている。今  
の地形から想定する  
ように、この海岸は、  
当社前で、大きく左  
曲っており、北西の  
風に吹き寄せられる  
砂が小山をなしたも  
のと思われる。この  
浜宮、今はこの社名  
で呼ばれている。と右側釣  
川上流に鎮座する「五月宮」  
は神郡一の河「釣川」の河  
口入口の神域であつた。  
往昔には、神郡内撰社五  
社の神輿が船でこの地に集  
合され、河口を上り、辺津  
宮前の「御前ノ浜」より入  
御をされていた、この時辺  
津宮の神輿が頓首として返  
還された地がこの木皮社  
(浜宮)である。宗像神社  
史にも、次の様に記されて

その時多くの貝殻が発見さ  
れている、この地が住居  
地になつて居るの  
現状である。しかして、  
この地元の人々に大切に守  
られて、恒例の祭日には  
「三供撰角大会」等の神賑  
行事が行われる等、住民と  
の関りは深い。  
故に古来より、宗像大社  
境外社として大切に守られ  
て来た神社で現在も、例祭  
の五月五日には「浜宮祭」  
の址といふは誤りなり  
宗像古記には湊  
ノ木皮社と有。御  
事次第に四月一日巳  
時湊ノ木皮社事、社  
者祢宜作、御借者政  
所沙汰、敷物者上八  
村徳、御斤大飯御酒  
一瓶所沙汰、小野  
浦(開カ)ヨリ魚一  
ま桶、漆浦ヨリ貝鮑  
小勝浦神人富進上  
と有。……云々。と  
記されている様に当  
時、重儀の祭事が  
齎行されていた事が  
伺へる。五月五日に  
ついて、宗像記曰  
「田島より十三町北  
に五月濱在。昔田島  
の神の御所也。五月五日、  
此所にて競馬をなす此故に  
五月濱と云。五月五日、宗  
像家人、家々の嫡子花やか  
に立、五月濱に出て馬を  
是を五月兒と云。家  
をつくりなれば、庶子此  
日かけ馬をのりて、越度無  
き時、宗領の座に直る。是  
古来の風俗也」と記され  
大変な重儀であつた事が記  
されている。「庶子から宗  
領の座に直る」とある。

### 宗像大社

#### 辺津宮本殿

祭神は宗像三柱大神で、  
由緒にも「往古宗像神社神  
幸ノ舊跡言伝フ」と記  
されている。三枚旗五ツ  
実の神紋を扁額にもつ石  
祠は、ソテツが並び茂る、  
南方諸島の様な境内地に三  
基の鳥居の建つ参道奥に鎮  
座されている。  
戦前までは松林であつた  
社周辺も、戦後の食糧難時  
代に畑地として開墾された



### 宗像大社

#### 辺津宮本殿

祭神は宗像三柱大神で、  
由緒にも「往古宗像神社神  
幸ノ舊跡言伝フ」と記  
されている。三枚旗五ツ  
実の神紋を扁額にもつ石  
祠は、ソテツが並び茂る、  
南方諸島の様な境内地に三  
基の鳥居の建つ参道奥に鎮  
座されている。  
戦前までは松林であつた  
社周辺も、戦後の食糧難時  
代に畑地として開墾された